優秀賞 ［大学生の部］

メディア・リテラシー
――ユビキタスネット時代に新たな価値を生み出す知恵

中京大学社会部３年
生田（いくた） 和徳（かずのり）さん

第1章
ユビキタスネット時代の到来と メディアによる新たな歪の構築

1 ユビキタスネット社会と課題

「ユビキタスネット」これは、ITの高度化と世界レベルでの標準化によって「いつでも、どこでも、何でも、誰とでも」つながる、近未来の日本に到来する新しい社会だ。ユビキタスネット社会の実現によって、私たちを取り巻く様々な“壁”が崩れる。ITを介せば、欲しい情報や商品、サービスが今よりもずっと簡単に手に入り、国や業種、業界といった壁を越えたビジネスも効率化する。さらに、住んでいる場所や年齢の違いといった、人と人との壁を超えてつながる、新たなコミュニティの誕生の可能性ももたらされる。しかし、便利さの一方で、歪や格差も生じる。壁の崩壊によって、人も企業も、ありのままの姿で同じ土俵に立たされる。すると、IT世界の「強者／弱者」「勝ち組／負け組」といった関係性が如実に浮き彫りになってしまう。

2010年、私たちがユビキタスネット社会をよりよく生きるためには、ゆるぎない個性に裏打ちされた「人間力」を持つ人として自立し、ITがもたらす社会の歪を乗り越える知恵を身に付ける必要がある。

2 人間力とメディアの特性

私は、人間力を「他を尊重し、様々な事象を多角的に見る視点を持って、本質を見極める力」と考える。ユビキタスネット社会の「歪や格差」によって生じる「強者／弱者」「勝ち組／負け組」という二極的な関係性。この関係を絶対的にしない為には、ユビキタスネットがもたらす情報の中の生活者、消費者としての確かな人間力が試される。

ITの進歩に伴って、情報機器はシームレス、マルチモーダル化され、社会を取り巻くメディアは一層多様化する。多様化したメディアによって媒介される情報は、現在よりもはるかに多くなり、私たちは膨大かつ多種多様な情報に囲まれ、情報を「賢く」消費することが求められる。なぜなら、メディアは偏見やステレオタイプといった固定概念を生み出し、多くの誤解を生じさせやすい存在だからである。

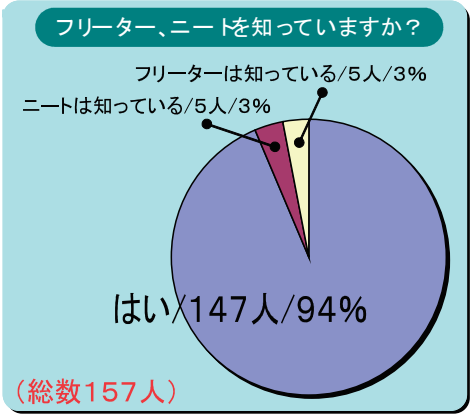
メディアが伝える情報は、現実の一部を切り取ったものであって、現実そのものではない。例えば、テレビの映像はテレビ局の誰かの手によって編集されているし、新聞記事は、新聞記者の手によって書かれたものである。つまり、メディアが媒介する情報には、必ず「作り手」がおり、作り手の主観によって加工され、送り出されている。そのため、受け手によって解釈はバラバラで、送り手の意図とは全く異なったイメージを創り出す場合もある。では、メディアの影響力はどれ程なのだろうか。

3 調査／「ニート」からみるテレビメディアの影響

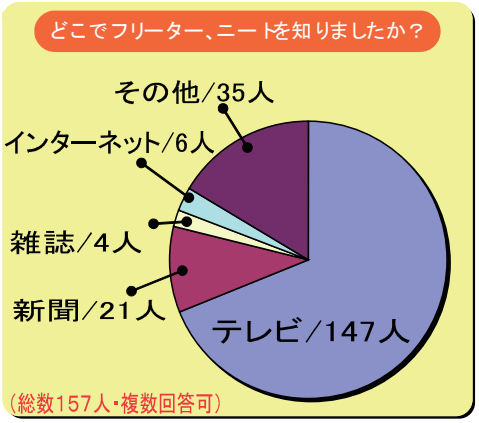
現在、メディアによって新たに偏見や固定概念が作られている。それは、近年急速に広がった「ニート」という言葉から見ることができる。

私が大学で所属するゼミでは、教育をテーマとし、現代の若者問題とされているフリーターやニートの研究も行っている。そこで、私は、ニートに対しての意識とメディアとの関係を探るため、これからの日本の未来を担う、高校生157人を対象に質問紙アンケート調査を行った。その結果、「フリーターとニートを知っている」と回答した生徒は全体の94％の147人、ニートに限ってみても152人と、ニートの認知度はとても高いという結果になった（図-Ｉ参照）。そして、「ニートを知っている」と回答した人の96.7％にあたる147人が、ニートをテレビから知

フリーター、ニートについての意識調査
（2006年6月実施）
【図ーⅠ】



【図ーⅡ】



【表-Ⅰ】ニートのイメージ

・社会の落ちこぼれ	・迷惑な人	・たちが悪い
・人間的にダメ	・いけないこと	・現実から逃げている
・寄生虫	・自分では何もできない	・だらしない
・最低な人	・良いイメージはもたない	
・変人	・反社会的なイメージ	

ったと回答している（図-Ⅱ参照）。このことから、テレビメディアが知識の出所となっている事が分かる。

4 ニートに抱かれているイメージ

私はこの調査の中で、ニートに対してのイメージや知っていることを書く項目も設けた。その中で多かった「親に頼る・パラサイト・家に引きこもる」等をキーワードに、同じ意味合いの回答を弾き出した。すると、約半数の68人が「ニート」は「ひきこもり」の事、とイメージしていることが分かった。その他の回答では、「学校へ行かない」「仕事をしない」という内容が多くを占めた。
次に、表-Ⅰを見てもらいたい。

表-Ⅰにまとめたものは、ニートを差別視した回答といえる。これらを、個人的な解釈の自由と割り切ってしまえばそれまでだが、私は問題意識を持ちたい。なぜなら、今回の調査では具体的な例は挙げておらず、表-Ⅰは「ニート」という言葉だけでイメージされた回答だからである。これは、ニートの存在を社会から否定する、「偏見」であり、メディアによって創られたステレオタイプである。

5 メディアに創られたイメージ「ひきこもり」が「ニート」？

検証1―定義からみる

ニートは、厚生労働省と内閣府で若干異なるが定義が決まっている。厚生労働省ではニートの定義を「15歳～34歳の非労働力人口のうち、通学や家事を行っていないもの」とし、内閣府では、厚生労働省の定義に「家事手伝い」を足し、「既婚者」を引いたものとしている。このように定義を見る限りは、ニートのイメージで多くを占めた「ひきこもり」を包括してはいるものの、「ニート＝ひきこもり」と限定的ではない。

検証2―数の違いからみる

さらに、ニートとひきこもりは人口も異なる。内閣府が出しているニート人口は、84.7万人。これに対し、若者問題研究で著名な尾木直樹等によるひきこもりの予想人口は、100万人を超えるとも言われている（尾木

2000：83)。

以上から、「ニート」と「ひきこもり」は、定義の問題と、数の違いによって、単純にイコールにできないことが分かる。

6 ニートの社会的被害者という側面・背景にある社会構造の問題

フリーター、ニート問題は「なる人間が悪い」と一刀両断に切り捨ててしまえるほど、根の浅い問題ではない。第一の理由に、求人の減少と失業の増加がある。バブル崩壊後、企業が一斉に新卒採用を控える時期が続いた。そこから現在にまで続く不況の影響で、高卒求人数を見ても、1992年には167万人あったが、現在では約20～22万人にまで減少している。雇用が不安定化し、希望する就職口が無いという若者がフリーターやニートに「なってしまう」ケースがある。また、リストラや失業によって社会からドロップアウトした後、就労意欲を削がれてニートになるというケース等もある。

第二に、定義の曖昧さがある。1-5に記したニートの「定義」は曖昧だ。例えば、フリーターがアルバイトをしばらく止めればニートになる。何もしなかったニートが職安に足を運べばフリーターになる。さらに、国の機関で定義が異なるのも曖昧さを生み出す原因である。

ニートの背景にある、これらの社会構造の問題を知れば、ニートを簡単に差別視はできないだろう。

第２章
未来への提案「メディア・リテラシー」

1 ニートの事例からみえたこと

ニートの事例から、メディアは受け手が批評的に読み解く姿勢を持たない限り、ステレオタイプや偏見を生み出すと証明された。メディアが媒介する情報が大量になれば、その危険も増加する。だが、ユビキタスネット社会では、私たちは誰でも様々な情報を集められるようになる。そのため、ユビキタスネット社会では、私たちが社会の真実の姿を知ろうとする姿勢と、メディアに積極的にアクセスし、操作し、必要な情報を正しく取捨選択できるスキル「メディア・リテラシー」の力の獲得が求められる。

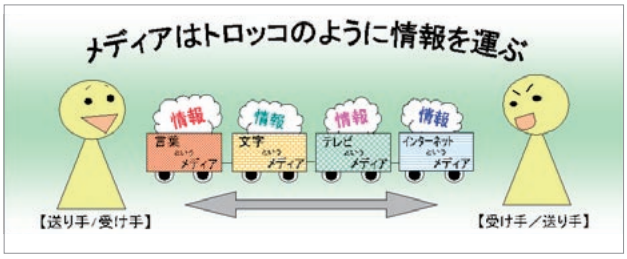
2 メディア・リテラシー

まず、メディア・リテラシーとは何か。東京大学大学院情報学環助教授の水越伸は、メディア・リテラシーの定義を、「私たちを取り囲むメディアの仕組みや特性を知り、メディアを通してさまざまな情報を注意深く受け取ったり、積極的に表現をしたりするための素養や能力のこと」（メルプロジェクト・民放連編 2005：4-5）としている。この概念を「テレビメディアの理解と活用の仕方」と安易に訳してはいけない。メディア・リテラシーとは、情報の媒体としての広い意味を持つメディアを批判的・批評的に読み解き、「メディアを読み書きする能力」なのだ。これは、様々なメディアの特性を理解し、最終的には自分で表現できる力を表している。

3 メディア・リテラシーの理解・「メディア」と「リテラシー」

一般に「メディア」というと、テレビや報道機関といったマスコミに解釈されがちだが、実際はもっと広い意味を含んでいる。メディア（media）の語源は中間（medium）に由来し、図-Ⅲのように、メディアは送り手と受け手との間で情報を運ぶ、トロッコのような働きをするものなのだ。すなわち、メディアとは「情報の媒体」を指している。

【図-Ⅲ】メディアの働き



リテラシーとは読み書き能力を指している。元々、リテラシー（Literacy）とは識字教育を表していた。リテラシ

ーは識字から始まり、それが時代を経て、総合的な「読み書き能力」へと変化し、学校での学びの発生へと展開した。つまりリテラシーとは、「ある概念や対象を理解（読み）し、さらにそれを自ら表現（書き）する力」となる。

4 学校がもつ可能性

メディア・リテラシーの営みを社会に浸透させる可能性を持っているのは、学校である。私自身も、高校で放送部というクラブ活動を通してメディア・リテラシーを経験した。この活動は単に“放送局の真似事”などではない。映像や音、自らの声といった多種多様なメディアを活用しながら、文化祭や卒業式などのプロデュースを行い、イベント自体をメディア・表現の場ととらえ、その可能性に挑戦している。また、自分たちでテーマを定め、調査・取材したものを、試行錯誤を繰り返しながらビデオやラジオ作品としてまとめ、広く社会に問題提起するなど、学校の枠を超えた活動を展開している。私が経験した活動は、「調べて・まとめて・伝える」という表現の全体性を学ぶ、「メディア・リテラシー活動部」であった。

5 メディア・リテラシーを教育に位置づける

ユビキタスネット社会を迎える日本において、ITを使いこなすスキルと問題を解決する力であるメディア・リテラシーは、新たな学びとして教育の中に位置づける必要がある。近年施行された、ゆとり教育や総合的な学習の時間は、その可能性をもっている。しかし現在、こども達の学力低下が問題視され、これらの試みは縮小傾向にある。これでは何も始まらない。従来の上から下へ知識を流し込む縦割りの教育では、広い視野を必要とする学びの発生は望めない。本当の「ゆとり」とは、学びの中で生まれる試行錯誤の時間を保障することであり、それを実現できるのが、教科の枠を取り払った「総合的な学習の時間」なのである。

「調べて・まとめて・伝える」営みは、試行錯誤を繰り返し、問題を発見し、解決する力を養う。そして、自らがメディアの「作り手」となる事で、「送り手と受け手」という関係性に潜むメディアの特性を知り、「ニート」のような偏見を持つ危険性も減少する。この一連のメディア・リテラシーのプロセスが、ユビキタスネット社会の中で生き抜く、豊かな人間力をもった“人”としての自立をもたらすのである。

まとめ
私たちが創発する価値

2010年。ユビキタスネット社会を生きる私たちは、情報に惑わされることは無い。

ITを生活の一部として活用し、賢い情報の消費者となるのだ。メディアを読み解く力を持った時、偏見や差別といった歪は消え、人と人とが、互いに個性を持った一人の人間として尊重し合い、よりよく生きる社会が創発される。それは、確かな人間力を持った私たちが創る、価値ある未来なのである。

参考文献
1)『ニュースが間違った日』林 直哉＋松本美須々ヶ丘高校・放送部、2004、太郎次郎エディタス
2)『子どもの危機をどう見るか』尾木 直樹、2000、岩波新書
3)『ニート・フリーターと学力』佐藤洋作・平塚眞樹、2005、明石書店
4)『メディアリテラシーの道具箱』東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟、2005、東京大学出版